

「思融—良舎」周辺のこと・杭州出自の宋人のこと

——「軍記物語と東アジアの仏教世界」補遺——

牧 野 和 夫

はじめに

「軍記と語り物研究会（前身の軍記物語研究会を含む）」は、平成二十三年をもって五十周年を迎えた。記念大会（於鶴見大学 8月29日から9月1日まで）のシンポジウムのテーマは「軍記物語と東アジアの仏教世界」という。海彼のアジアの問題を軍記物語につなげる試み（渥美かをる、大曾根章介、増田欣、黒田彰氏等。近年の日本中世史研究の成果）は、この五十年の研究会の歩みの着実な成果の蓄積がもたらした重要なもののひとつとして歓迎するものである。

本稿は日本に残存しえた微細な切片を採集し、十三世紀

後末期の日本における「東アジアの仏教世界」の一端を窺い知ろうという基礎的な研究のひとつの試みである。


一、良舎・思融に関する資料の確認

凝然撰『円照上人行状』は、「円光房良念」という戒壇院円照門下の有力な学僧の経歴を巻下に次のように語っている。

「円光房良念、越後国人、住戒壇院、発心受戒、後就洛陽大宮明了房、受学悉曇、稽古氷藍、遂謁小河上綱、重学悉曇、小河者即了公之本師也、遍随善友、受学真言、東寺諸流、究小野・廣澤、又延曆・園城磬奥獲極、兼包之徳、無有競者、門弟非一、各授一方」（『続群書類従』所収 東

大寺刊本11頁)

この小川上綱から悉曇を受学したことや諸流兼学のことなどの経歴は、房号を円光房と同じくした「良舎」の経歴に重なり「良舎」と「良念」は同一人物か、との疑念も生まれる。納富常天氏は、「東山太子堂白毫寺と忍性供養塔」(『金沢文庫資料の研究 稀観資料篇』1995・7 法蔵館刊 所収)で円光房良舎について、この『円照上人行状』の「良念」の一節を活用している。

改めて東大寺図図書館蔵『円照上人行状』の影印を紐解くと、「」とあり、明らかに「舎」とよむべき箇所である。

円光、円光房と呼ばれる僧は、『円照上人行状』の記述箇所において、円光房良舎その人を指すと考えてよい。

『円照上人行状』巻中に「人王第八十九代聖主御宇文永初曆、於金山院、大行灌頂、諸方律德行真言者、預職衆選十有六人、……(略)……尊珍・円光等也」と文永(1264)初曆の鷲尾に円照に随うひとりとして「円光」房を挙げる。円照の「灌頂弟子、其数非一、……(略)……円光房……:如是等也」(14頁)ともいうのである。良舎が戒壇院円照門下の学僧であり、凝然の目からみて門下僧の内でも聞こえた学僧であったことが知られる。

良舎の履歴は、天台系・真言系・戒壇院系の仏書聖教類

に区々な形で、各々の履歴を記してきたが、『円照上人行状』の「良舎」を「良念」と誤って以降、円光上人良舎を明白に戒壇院円照門の逸材のひとりに数えて履歴に言及する例を見ないのである。

ここから知られる重要な一点は良舎が戒壇院止住の「後就洛陽大宮明了房、受学悉曇」ことであり、「小河者即了公之本師」ということである。「禪性房、後改空月房、洛陽人也、悉曇明了房之甥也、住戒壇院、明律懸鏡、……:住高野山、学真言教、」ということも知られる。既に紹介したが信範撰『悉曇字記聞書』(東寺観智院蔵206函13)第一冊奥書に

「観心三年六月廿八日賜大柳御本於河東妙法院御前六帖内五一帖書写終畢 祐禪

此是明了房信範上人抄也

御本奥云 以白毫院上人御本校合畢

八月十三日校合畢」

第七冊奥書には

「正和五年二月十八日賜師主白毫院／上人御本校合畢」

とある。「明了房信範上人抄」とあるが、「白毫院上人御本」、即ち師信範の撰述にかかる『悉曇字記聞書』を弟子

の良舎が書写か所持していた由緒ある一本で校合したことがわかる。良舎の弟子筋が正和五年（1315）に校合した一本である。

円光上人良舎は、小河承澄に師事する前に「大宮」信範に師事していた。しかも「大宮」信範の本師が他ならぬ小河承澄であった。この点は、別稿で触れることになるが、重要な事実である。越後生まれであることも、悉曇のことを考慮すると看過できない。

東寺観智院蔵の悉曇書群の本奥書を辿り返すならば、『悉曇私鈔』上下（203函9）の本奥書には、

「本云／文応元年庚申十月一日抄了是則稟高德嚴／訓添下愚料簡為備廢忘愁以記之矣／仏子信範（年三／十八）／本云／弘安八年乙酉八月十六日於関東御堂辺／値見澄春（小河殿房人／御律師）写本之所奥書云建／治元年六月十九日於小河御坊以右本書／写了是明了房之私抄也……右言高德者此小河殿／御事欵 澄春云々……」

信範が他ならぬ小河承澄に悉曇を学んでいたところは文応元年（1260）頃であったことが知られる。建治元年（1275）の小河の承澄・関東の澄春ということでは『阿婆縛鈔』書写の問題にも係わるが、ここでは省略する。

『悉曇字記』一冊（206函10）によれば、「文永十二年歲次／乙亥二月二十一日書写畢／陰葉信範」とあり、「為証

明進覽／小川高德之所為證本之由預御感畢」ということである。信範の悉曇修学は文永十二年（1275）に及ぶものであった可能性がある。ここで良舎の活動の拠点白毫院についても一言するならば、『円照上人行状』巻下にも「大谷速成就院」として記述がある。

「実法房道恵、洛陽人也、住延曆寺、初住戒壇、次住鷲尾、次住大谷速成就院、後住関東」

とある。戒壇院から鷲尾金山院、更に白毫院（大谷速成就院）へと移住しており、戒壇院から白毫院（大谷速成就院）へ移住した良舎が異例であったわけではない。ただ、白毫院（大谷速成就院）は、有力な檀主より円照及びその門下僧に施与されて管領した寺院ではなかったのである。

更に『円照上人行状』において留意すべき学僧に、戒壇院円照門下良舎と師資で相互に結ばれた思融がいる（思融については、既に本誌79号などでも触れているが、思順と併せて、『軍記と語り物』48号所収稿に、詳述する予定）。思融についても、『円照上人行状』は貴重な履歴を伝えている。

「弘長嘉曆、円珠・思順両徳移住鷲尾、修学顕密、助照公化儀」（5頁）

「文永初曆、於金山院、大行灌頂……勝鬘院住持円珠大徳并思順大徳……円珠誦経導師、思順教授」（6頁）

「道本房、諱円海、東大寺累代寺僧、……乃聖守・円珠両徳弟子也」(9頁)

「諱忍空、房号空智、駿河国人也、……即勝鬘院円珠・思順両徳東遊之時、相隨上洛、遂入泉涌律場、珠・順両徳者本泉涌寺住僧也」

「證道房、諱実融、北洛人也、初住泉涌寺、随思融(後改/円珠)上人、移住鷲尾、後住高野金剛三昧院、是意教上人真言付法也」(12頁)

「弘長季曆、泉州家原寺仏法大徳、以彼寺院、施与照公、彼所者、行基菩薩降生之砌、菩薩即彼処建立伽藍、……彼寺院主婦上人徳、以施与之、即安僧侶、建興仏宗、上人後讓之勝鬘院円珠上人、彼之門人、于今興□、□通密教、敷演台宗」(7頁)

参考「正元々年己未之曆、四条垂相以洛東鷲尾(法名号/金山院)寺院、施照上人」(5頁)

「北洛鷲尾者上人常所住之寺、為諸門人、開法不絶、……又請泉涌寺円珠上人、令講律鈔」(8頁)

などの記述を拾うことができる。纏めてみると、次のようになる。

「正元々年(1259)己未之曆」に四条垂相によって円照に施与された鷲尾(金山院)へ「泉涌寺円珠上人」を招請し「令講律鈔」、「弘長(1261)1263」嘉暦」

には、「円珠・思順両徳」は鷲尾へ「移住」したようである。「珠・順両徳者本泉涌寺住僧也」とも記されている。

「文永(1264)初曆」の「灌頂」(於金山院)には、「勝鬘院住持円珠大徳」は「誦経導師」であった。「弘長季曆」には、「泉州家原寺」が「仏法大徳」の手によって円照へ「施与」されてもいるが、後に「勝鬘院円珠上人」に譲渡されている。

ところで思融は、醍醐寺本『師資相承血脈』によれば、頼賢・親快到師事していたことが知られ、更に『野澤大血脈』(『続真言宗全書』巻25所収)によれば、「憲深―光賢―思融―良含」や「実賢―如実―思融―良含」、「成賢―光賢―思融―良含」などの相承血脈が示され、醍醐寺僧の許で真言諸流を学んだことが確実である。甲田宥咩氏は「頼賢―実融」の実融に関連して次のように推測している。

「実融が高野登山後意教上人に受法したことは諸書一致している。その時期が文永四年(一二六七)五月十二日の伝法灌頂以前であることは間違いないが、前以って上人に就いて四度加行を修したとすれば、登山の時期はこれより二三年は早くなる。本朝高僧伝のみの伝承ではあるが、勝鬘院円珠から密軌を伝えたというのは、高野登山前の若年の受法とすれば、四度加行も円珠の許で行なっている可能性はある。円珠は高僧伝六十によると泉涌寺智鏡・道玄

の二師に律と密教を受け、後撰津四天王寺の勝鬘院に住したという(同前・三四八上)。徳治二年(一一三〇七)に白毫院静基の口説を記した血脈紗(続真25『野沢大血脈』)によれば、円珠は相意房思融の改名で、類聚記の深賢の項に「思融(印可)(聖人、相意房、醍醐住、実縁法眼子)」と出ているのがそれである。聖人とあるから、この人も遁世していたのであろう。醍醐本血脈には意教上人の資に思融が出ており、他にも深賢・光賢・如実等、醍醐の人々から伝授を得ている。若し実融が最初円珠の許で密教を学んだとすると、その周囲との関連から意教上人を慕って高野へ登るのが何とはなしに理解される(甲田宥咩「意教上人伝攷(下)」『高野山大学』密教文化研究所紀要』13号 2000・2)。

もし、円珠である思融が光寶に師事した、とするならば、光寶没年とされる延応元年(1239)以前に醍醐寺に修学の日々を送っていたことになる。既稿に「成賢―頼賢」の師資の流れで頼賢にも師事しており、頼賢が醍醐寺を離れ慶政の法華山寺へ赴いた際に付き随っていた可能性もあることを記したが(これらの点の解明は今後の課題の重要なひとつである)、『円照上人行状』からは全く窺うことのできない履歴である。『円照上人行状』は、頼賢門下の実融に関連して「後住高野金剛三昧院、是意教上人真言付法

也」として高野山移住後の意教上人頼賢には触れているのである。近世に至る僧伝類に認められない頼賢及び頼賢門下の慈猛など(思融・義準などの可能性)の履歴の一齣「法華山寺における修学(了行の一件がからむか、どうかについての問題は、今後の課題として残る)」は、戒壇院側の資料においても「空白」であり、逆に改めて重要な「一事実」として考慮されなければならない。

既に指摘したが、弘安二年正月二日に良含が多年の伝授をまとめて「書」した随心院藏建武二年釈禅律写「陀納深密口決西勝」一帖の本奥書には次の通りある。

「弘安二年正月廿日書之是則

先年先師所奉受也西院者

西院西院権律師尊源御口

受也 勝鬘院者師主人思融」8・ウ

御口伝也皆是秘密也可秘々々

文永二年九月十四日受之

実賢 尊源 良含

弘長元年之比受之

実賢 如実空願上人 思融

良含」9・オ

弘安六年九月十七日於白毫院

書写畢

依感靈夢伝受之并此等

自抄拝領之努々不及他見

由深有御誠三宝垂照覽

金剛佛子澄豪」9・ウ

「弘長元年之比受之／実賢 如実空願上人 思融 良

含」とあり、「思融」からの「御口受」が勝鬘院住持円珠大徳の鷲尾移住前後に行われている。すなわち、戒壇院円照門下として鷲尾の周辺で「思融—良含」の師資相承の關係は成り立っていたのである。

甲田氏が「徳治二年（一三〇七）に白毫院静基の口説を記した血脈紗（続真25『野沢大血脈』）」と記すが、続真言宗全書の巻25『野沢大血脈』は、大方、円光上人良含を経て静基に伝授された口授類によって成り立っている。東寺観智院蔵『秘抄聞書表題』は、表紙見返しに「第十七帖奥云」として「此抄者円光上人（右傍に「白毫院」）良含所受隆澄（理智院／僧正）良裔（石蔵／大日上人）円珠（天王寺／相意上人／思融）（右傍に「勝鬘院」）／三帥ノ口説妙智房静基類聚之云々」とあり、白毫院良含などの口授を妙智房静基が類聚した一書である。現存資料（撰述書『密宗血脈鈔』など、記録類）から妙智房静基を白毫院の有力な学僧とすることが誤りでないことは明瞭であるが、鎌倉時代後期の散逸資料（推定可能な範囲で）を含めた環

境を勘案すると、円光上人良含の「存在」には際立ったものがある。遁世僧にして有力な学僧のひとりとして鎌倉時代後期の仏法史上に位置付けるべき時期に来ているのではないかと考える。また、良含の師のひとり思融も『円照上人行状』に頻繁に登場する「圓珠」であるが、東大寺「戒壇院」忍空とともに室生寺に参詣し舍利石塔を礼拝した「天王寺勝鬘院」の「一蓮房」「真尊」などと併せて、円照周辺の看過しがたい学僧である（牧野「延慶本『平家物語』における「東山鷲尾」の注釈的研究』『説話論集』第11集 2002・8清文堂）。

正嘉・文永・弘長頃に円照及びその門下僧へ有力な檀那より施与され管領した寺院には、家原寺・金山院・徳大寺内大悲院・靈山院・竹林寺などがあり、円照の「化儀」や律・天台の「講義」などが、むしろ、これらの施与に係る寺院で活発に行われていることは、「遁世僧」の鎌倉後期における位置付けを解明する上で重要な傾向であろう。

家原寺は当時戒壇院系の思融へ譲られ、金山院は「金山院任檀那意、不付門人、于後鳴瀧上綱管領、即檀那隆親卿之弟也、于後照公門人、靈山信忍智生房、住持彼寺、忍公戒弟子」（『円照上人行状』下 頁15上段）ということで一時靈山院の信忍智生房が住持となり、徳大寺も弘安年間に良含が講義をしている。しかし、1277年円照の没後

に円照門流を離脱した寺院も多く、金山院などは「無住持」の状態が続いた後、「澄豪―恵鎮―道光」と次第する天台系の光宗が再興している。金山院については「延慶本『平家物語』における「東山鷲尾」の注釈的研究―寺院ネットワークということ―」（『説話論集』第11集 2002 清文堂）、家原寺については軍記・語り物研究会大会のシンポジウム「軍記物語と東アジアの仏教世界」で触れたので譲る。

東山靈山院については近時収集しえた情報のいくつかを、牧野「日本中世文学における十三世紀後末期東山白毫院・靈山周辺―書物ネットワークの視点から―」に覚書風に記述した。文永頃の情報として冷泉家時雨亭文庫蔵の歌書・歌学書群をめぐる貴重な指摘があった。靈山院における素寂・定円・清誉の係わる営為、即ち活発な書写活動の数々が知られるにいたった点が挙げられる。弘安・永仁の頃には『七天狗絵詞』の撰者（のひとり）と比定しうる遍融（寂仙）が「靈山院寂仙上人」と呼称されていた点も遍融の事績の解明とともに看過しえない。併せて「遍融―円海―秀範」と次第する秀範も「東山靈山」に出入りして書写活動に励んでいた点にも留意した。

ここに靈山・靈山院の記述を『円照上人行状』に拾い、補記としておく。靈山院のことは次の記述に認められる。

「慶舜□、改為雙圓房、是重受也、本菩提山住僧、後住靈山院、次住戒壇、……」（『円照上人行状』中 頁9下段）

「諱信忍、道号智生、居俗有忠、厭世求法、年二十二落髮、登高野山苦行、入招提寺学律、随玄上人受戒、海龍王寺・不退寺・光臺寺、彼此遊住、修大悲行、入照公門、住戒壇院、……移住金山、大助照公化儀、即文永二年八月二十五日重受具戒、宋人帰徳、洛東靈山建一堂庵、施与上人、後住持金山院、……」（『円照上人行状』下 頁12下段）

「金山院任檀那意、不付門人、于後鳴瀧上綱管領、即檀那隆親卿之弟也、于後照公門人、靈山信忍智生房、住持彼寺、忍公戒弟子」（『円照上人行状』下 頁15上段）

信忍智生房に関する記述が多く、特に看過しがたい記述に信忍が「移住金山、大助照公化儀」、鷲尾金山院で円照の化儀を助けていた頃、「文永二年（一二六五）八月二十五日信忍、重受具戒、宋人帰徳、洛東靈山建一堂庵、施与上人、」した、というのである。

「一堂庵」がどのような建築物であったか不詳であり、宋朝建築様式であった、と言いうる資料はない。しかし、堂・庵の問題は、おそらく中国の宋・元仏教の庵堂の普及と連動したものであり、宋人の寄進にかかる「堂・庵」が私庵であったことも確かだ、実は、家原寺・金山院・徳大寺・靈山院など、文永・弘長頃に円照及びその門下僧へ施

与された寺院も、宗派という枠を取り払った「私庵」としての機能（いわゆる従来の顕密の寺院内の兼学とは、質的に異なるか）を想定できるのではないか。「徳大寺之内大悲院」などは、良い例ではないか。勿論、宋代における庵堂の普及にそのまま倣うものか、どうかは、今後の課題であろう（竺沙雅章氏「宋元仏教における庵堂」〔『宋元佛教文化史研究』2000・8 汲古書院刊〕が、宋朝仏教の端的な移入受容の具体的な「かたち」として「庵・堂」の問題は重要なものとなりそうである（東禪寺版大藏経の補刻葉に認められる「道」「道人」と「庵」については、前述のシンポジウムで指摘した）。

二、杭州居住の宋人書生——「智恵」を軸にして

「智恵」という宋人についてささやかな「新知見」を紹介した（牧野「集古会会員と中世典籍類の蒐集・継承について」〔『実践国文学』78号、平成22年10月〕、牧野「日本中世文学における十三世紀後末期東山白毫院・靈山周辺——書物ネットワークの視点から——」〔『実践国文学』79号、平成23年3月〕が、それは「円覚経略疏之第一之二」の「奥書」に「永仁參年乙未五月十四日書写之畢執筆宋園杭州路仁私（和か）縣居人智恵之」と記している一事実であ

る。

納富常天・横内裕人両氏指摘のごとく、この宋人智恵が書写に係わった『華嚴演義鈔』残十九卷三十三冊（卷十五・下・尾に智恵書写の奥書）には、卷十一・下の尾に「永仁三年乙未十一月九日 於泉州久米多寺書写畢／執筆大唐国行在臨安府小堰門保安橋居洪三官人書一校了」とあり、洪三官人が書写していたことが知られる。この二人の宋人が同一人物の可能性は否定できないが、出家して「宋園杭州路仁和縣居人智恵」と号した後に「大唐国行在臨安府小堰門保安橋居洪三官人」と俗名を用いたと考慮せざるをえないことも確かである。弘安・永仁頃の宋人書生たちの同筆とも見紛う宋風の秀勁な書風が、むしろ極めて均質な個性を消した筆致の顕れと考えるべき若干の余地も残す点については、別稿に譲る。なお、近時試みた金沢文庫備付の紙焼写真の比較から、納富・横内両氏の推定に賛した

い。

ここで「智恵」について考慮すべき点「臨安府：洪三官人」の二つの語彙「臨安府」と「官人」を試みに探ると南宋の臨安府の出版関連の木記中に見出したので報告する。

「臨安府衆安橋南街東開經書舖賈官人宅印造」「衆安橋南賈官人經書舖」などともある「官人」が浮上してくる。

一点は大東急記念文庫蔵石井積翠軒旧蔵（南宋）刊『佛

国禪師文殊指南圖讚」一帖である。

「宋刊杭本。宋張商英述。自序(大字)の末に「臨安府衆安橋南街東開經書舖賈官人宅印造」の木記がある。界高約八寸二分五厘。上部に図を刻し、下部に讚を加へてある。每半折本文十行有界。唐土佚書。卷首に「高山寺」朱印記を捺す。裏打補修帖装、大きき、縦約一尺、横三寸六分。摺刷よき伝本である。内野皎亭文庫旧蔵。」(『石井積翠軒文庫善本書目』昭和17年10月刊)

二点目は、中国国家図書館蔵本周叔弼旧蔵(南宋)刊細字本『妙法蓮華經』一卷である。

「後秦釈鳩摩羅什訳。宋臨安府賈官人經書舖刻本。經摺装。半葉十二行、行二十九字、框高18・8厘米。巻端有扉畫。羅振玉、勞健跋。」(『中国国家図書館 古籍珍品図録』1999・9 北京図書館出版社)この(南宋)刊細字本『妙法蓮華經』の同版をケルン東洋美術館が所蔵している。

必要上、以下に日本現在宋刊細字法華經の分類・整理案を掲出する。国文学研究資料館特定研究班の第一回研究会(於印刷博物館、平成23年6月17日、科研基盤研究B「課題番号22320052」協力)で「新出宋刊細字法華經ほかをめぐって―高野山の聖教類の一端―」と題して口頭発表した際に提示した分類案である。扉絵の違いを軸に、

同版・復刻(被せ彫り)などの基準で分類したものである。竺沙雅章氏「宋代単刻本『法華經』について」(『汲古』40号 平成13・12)の分類案に尽きるが、新出の高野山寶壽院蔵の一傳本を加えて若干の考察を加えたものである。詳細については、『かがみ』42号(大東急記念文庫編、平成24年度刊行予定)に譲る。

1、十二行二十七字本(扉絵 A)

a、(南宋初期)刊本・談山神社蔵本・般若寺蔵本(整理番号四―三)・伝香寺蔵本…画面左下隅に刻工名

「四明陳高」

b、錢塘丁忠重刊本 能満院蔵本・傳增湘旧蔵本「南宋中期頃の刊刻か」…巻末「此經并将諸本校勘重開並無訛謬錢塘丁忠開字」

2、十二行三十字内外字数不等本(扉絵 B)

a、中国国家図書館蔵本(周叔弼旧蔵)・ケルン東洋美術館蔵本(後印)…画面左下隅に刻工名「凌璋」…巻末

「臨安府衆安橋南／賈官人經書舖印」木記

b、般若寺蔵本(四―四)・小汀旧蔵本「般若寺(四―四)本と)同版のようである」(竺沙氏前掲論文)…

画面左下隅に刻工名

「凌允昌」・巻末「臨安府棚前南経鋪王八郎家新雕印行」木記

c、般若寺藏本(四―二)・杏雨書屋藏本・高野山宝寿院藏本…画面左下隅に刻工名

「沈敦」・「臨安府修文坊相／對王八郎家経鋪」木記
d、雲龍院本…画面左下隅に刻工名「呂斌」

3、(扉絵C) 般若寺藏本(四―一)

参考 西大寺藏本 両面刷

その他、中国国家図書館蔵別本や「金剛寺藏断簡」や合衆国会図書館本があるが、原本・写真・書影など未見、従って判断保留。

1のb「錢塘丁忠重刊本」は能満院藏本・傳增湘旧藏本「南宋中期頃の刊刻か」(竺沙氏前掲論文)と推定されるもので巻末に「此経并將諸本校勘重開並無訛謬錢塘丁忠開字」とあり、杭州「錢塘」における開版か、と思われる。
2のa「中国国家図書館藏本(周叔毅旧藏)」は「臨安府衆安橋南／賈官人経書鋪印」と木記があり、大東急記念文庫蔵石井積翠軒旧藏(南宋)刊『佛国禪師文殊指南図讚』一帖の木記「臨安府衆安橋南街東開経書鋪賈官人宅印造」とある「臨安府衆安橋南」「賈官人」に同じ経書鋪で印

造・販売されていたものであろう。2のb「般若寺藏本(四―四)」には「臨安府棚前南経鋪王八郎家新雕印行」の木記があり、2のc「般若寺藏本(四―二)」の木記「臨安府修文坊相／對王八郎家経鋪」から見て、臨安府の王八郎家でいづれかを重刊したものである。2のbの後刻が2のcであろう、と竺沙氏は前掲論文で推定している。

日本現存宋刊細字法華経について云えば、ほとんどが臨安府の経書鋪の印造のものである。この経書鋪に係る「官人」が先の「洪三官人」の官人に連なる意味をもつものなのか、不詳であり、今後の問題であらう(堂庵などと買田にからむ中国石刻資料にも「官人」の用例あり)。南宋前期の少なくとも臨安府における出版の殷賑の様子を考慮するならば、南宋後末期の書物刊刻の工程における書写(彫)の刻工に対して版下の写工とも呼ぶべきか)の営為を担当する宋人が想起されるのである。

しかも、智慧に限らず杭州・臨安府を出自・居住と冠した「宋人」が少なくない。高野山正智院蔵『大毘盧遮那經義釈演密鈔』A本には、

卷五「正応四年極月十二日以亡魂之遺財課于書生令馳筆也……求法金剛弟子亮承」、

B本卷五「正応四年(辛卯)六月一日酉初時書写之畢／執筆大唐国杭州仁和縣住人法性書也」(高野山正智院の歴

史と美術』平成十年九月 高野山靈宝館)。

とあり、「杭州仁和縣」居住「宋人」に「法性」という「書生」がおり、正応頃に活動していたことが知られる。智恵と同じ仁和縣の宋人が同時頃に日本の寺院における「書生」として活躍していた。

更に、宮内庁書陵部蔵『古文孝経』(503—168)の奥書に、

「永仁五年(太歳/丁酉)二月廿九日 宋錢塘無/学老叟呉三郎入道書畢」

とあり、やはり杭州の呉三郎なる宋人が書生として京都周辺に居たことを伝えている。ちなみに、この『古文孝経』(503—168)の奥書の前に紙を継いで永仁七年の清原教有の識語があり、教有の依頼を受けて書生の仕事に従事したことが推定される。横内裕人氏「久米田寺の唐人」(アジア遊学『東アジアを結ぶモノ・場』2010・4 勉誠出版)によると、副題の通り「宋人書生と真言律宗」の係わりを多くの事例を挙げて証明するなかで正応三・四年にかけて久米田寺と東大寺戒壇院で「書生」として三人の宋人が活動していたことの報告がある。いずれも「大宋揚州大都督府西城住」人であり、智恵とは出自を異にするが、戒壇院との縁をもつ宋人である。久米田寺については、凝然も『円照上人行状』巻下で「禪爾」に及び次

のように記述する。

「円戒房中一、後改禪爾、北洛人也、……年二十一住金山院、随凝然、……至二十三、随照和上、受具足戒、与有海同壇、即文永十一年甲戌四月也、次住戒壇院、律藏・華嚴、研精積功、……後移住泉州久米田寺、」

と記すのである。久米田寺は、得宗被官安東蓮聖が建治三年に東大寺実玄より買得し、弘安五年(1282)に堂舎・経藏などの落慶供養が行われたが、凝然は前引箇所に連続して「彼寺者本行基菩薩創草建立之所也、法名隆池院、……置一切経、納華嚴書、以顯尊上人、為長老職、尊公讓之禪爾、檀那歸宗、莊嚴世諦、」と記述し、禪爾の許での莊嚴世諦を特筆している。横内氏は前掲論文の末尾近く次のように記している。

「真言律宗が規範としたのは北宋の元照(1048—1116)が整備した律であり、中国大陆の僧の生活スタイルを模倣したものであった。禪宗と並び宋風を看板に掲げた、国際的でモダンな宗派であった。久米田寺は、安東蓮聖と顯尊・禪爾らによって南都律宗の一大研究拠点に生まれ変わり、大いに中国の新風を謳歌していたのである。」

鎌倉時代の日本には、宋国出身の石工などの職人がいた。律宗と石工集団との密接な関わりは、厚い研究史をもち、

広く知られたものである。聖教に散見される宋人書生も、とりわけ真言律宗との関わりが深い。宋人書生は、その文筆能力を道具として、異国の地で逞しく生き抜いた。こうした集団が存在したことを、これらの聖教は物語っている。

南宋「教院（寺）」などを規範とした日本の諸寺院（その詳細な例証については大塚紀弘氏『中世禅律仏教論』2009・10山川出版社）が刊刻に多大な関心をもったことは想像に難くない。十三世紀後末期の泉涌寺版・西大寺版・いわゆる叡山版（小川流・穴太西山流へつながる）などの出版事業を考慮するならば、杭州・臨安府を出自・居住と冠した「宋人」のなかに「職」としての「写工」（經典の「金字外題」など）が紛れ込んでいたとしても不思議はない。

宋代における杭州の出版の繁栄については周知のことであるが、先に触れた細字法華経の日本舶載について見るならば、刷印時期については刊刻時期より若干降るものもあるかと考えられるが、そのほとんどが南宋初前・中期頃の臨安府の刊刻に係るものである。これらの細字法華経は、多く日本の層塔（十三重塔）に納入されたもの、仏像造立に際して胎内に納入されたものである。般若寺蔵の三本は、同寺の十三重石塔に納入されていたことが知られ、納入物

に建長五年（1253）の墨書のあるものがある。また、ケルン東洋美術館蔵本の細字宋刊法華経は、中国国家図書館蔵本（周叔毅旧蔵）に比してやや後印のごとく推してよいか、と思えるものであるが、日本の聖徳太子像の胎内納入物の一点であることが確認されている。その聖徳太子像の造立時期は同じ胎内納入物の墨書によって十三世紀中期のもの（建長元年の胎内文書あり）と判明する（詳細は『かがみ』所収予定稿参照）。

南宋初前・中期頃の臨安府の刊刻・刷印に係る細字法華経を十三世紀中期頃の日本において活用する点について、参考になるかと思われる事例がある。

日本舶載の現存宋刊大蔵経の大きな特徴と関連するものである。日本に現存する数蔵の検討から言いうることで確言するには至らないが、慶政とその関係僧侶が宋刊大蔵経の補刻葉へ施財する以前の舶載大蔵経は、尙然将来の蜀版大蔵経を除き注文時の「刷」ではなく、中国国内で流通活用した後のもの（再活用・いわゆる「古本」）であり、慶政の施財関与以降の舶載大蔵経に関しては、発注後間もない時点の刷印のものである。

十三世紀中期以前と以後において典籍舶載の様相が変わっているように考えられる。ここに、採りあげた宋人の場合、十三世紀後期に当たり日宋（日元の場合を視野に入

れるべきであろう)の關係はいろいろな局面で緊密・緊張(緊迫と云うべきか)の度合いを増していたのである。

結び

更に地方のケースを挙げることもできる。井原今朝男氏「中世寺院の国際性と外交僧」(『増補中世寺院と民衆』平成21・1 臨川書店)によって例示されて周知のものであるが、次の四例は、興味深いものである。今回の臨安出自・居住の宋人書生と、どのように係わるかは不詳であるが、参考として掲出する。

①滋賀県蒲生郡日野町西明寺にある什物の大般若経が重要文化財に指定されている。

弘安九年(1185)から始めた写経、弘安十一年まで250巻、正応二年(1289)に大宋国人普勲が書写に参加、料紙用途200文を助成した。正応五年(1290)完成。

②出雲国須佐郷東山宮奉納の大般若経は、正応元年(1288)から五年(1292)まで一筆書写。「執筆一乗宋人淨蓮」とある。巻24「大宋国安善執筆者」ともあり。

③長野県松本市本郷浅間神宮寺所蔵大般若経三巻。正応五

年(1292)「唐僧円空一筆一部書」、巻38には、「大勧進唐僧円空書」とある。

④三原市蔵大般若経。もと揚井莊上品寺にて書写、「執筆宋人謝復生」、「建康の住人で元の名は謝徳といい、改名して復生と名乗り、出家して明道の法号を号していた。」

※※※

根来寺とその周辺の典籍について、どうしても視野に入れないならばならない二、三の事実がある。かつ宋人の事績でもあり、『実践国文学』80号(平成23年10月)所収前稿「日本中世文学における十三世紀後末期東山白毫院・靈山周辺―書物ネットワークの視点から―」を補説・敷衍する意味でも以下に補記する。

「賢聖義略以十門分別 大乘基師撰 宝生院
562―5 31

(奥書) 永仁二年七月十二日未時書了 宋人法華筆 同年八月二十一日交点了 中川無量寿院少僧朝西 先年之比於当山十輪院被談賢聖義私記之時所書儲此本也」(『真福寺善本目錄続輯』223、『真福寺文庫撮影目録 下巻』411ページ・『真福寺文庫撮影目録 上巻』122ページ)

「先年之比於当山十輪院被談賢聖義私記之時所書儲此本

也」とあり、当山十輪院は根来寺十輪院であろうか、と思われるのである。「永仁二年」に「宋人法華」が書写した聖教が根来寺周辺経由で真福寺へ書写伝来していたようである。

更に頼瑠教学と密接な頼心ゆかりの典籍に豊む金剛寺が蔵する『薄草子口決』（本奥、頼瑠記）の本奥書には次のように記され、頼瑠周辺において宋人書生「法華」の手に係る書写の営為があきらかとなる。奥書より判断すると、最終的な書写は、正平年間の七十八歳頃の「禅恵」の手になるものであるが、「（一字金輪）」には、「永仁七年正月八日、於醍醐寺阿弥陀院、以兼朝法印本、書写了、」という聖忠の書写奥書があり（聖忠の肩付「東大寺東南院兼醍醐アミダ院」と）、〔理趣経〕には、「御自筆、同二月五日一見了、御判／永仁三年九月五日、仰宋人法華書写了、金剛仏子兼朝」とあり、後に「永仁七年正月廿六日」の聖忠の書写奥書がある。〔宝楼閣経〕には、「永仁六年九月十七日、仰宋人（法／華）書写了、金剛仏子兼朝」ともあり、後に聖忠・禅恵の書写奥書がある（この奥書と全く同奥書が〔第五〕にもあり、不審）。以上は『河内長野市史』第5巻・史料編二（昭和50・11刊）「金剛寺史料（奥書）」による。

兼朝は、正応二年に頼瑠が三宝院流、更に三宝院流宝心

方を印可しており、頼瑠附法の弟子である。兼朝令写本がいずれで書写されたかは不明であるが、師頼瑠の著作を頼瑠の附法の弟子兼朝が「宋人法華」に命じて書写させ、その写本を東大寺東南院の聖忠が書写していることは看過できない。『賢聖義略以十門分別』上を永仁二年に書写し、さらに永仁三・六年に『薄草子口決』を書写している「宋人法華」の履歴は不明であるが、頼瑠や根来寺・醍醐阿弥陀院周辺にも「宋人」書生の活躍が顕著であったことを証しており、同時期の戒壇院・久米田寺などに認められるものと同じ傾向を窺うことができる。

今後の課題であるが、その詳細の一部は、延慶本『平家物語』の会で発表予定である。

なおなお、シンポジウム「軍記物語と東アジアの仏教世界」（軍記・語り物研究会大会、平成23・8・29）での報告「延慶本奥書・応永書写『平家物語』四周の書物ネットワーク」は、若干の変更を加えて『軍記と語り物』48号（2012・3刊予定）に収載を予定している。併せて参照願えれば幸甚である。

本稿は二十二年度科学研究費（基盤研究（B））「日本現存福州版大藏経の版刻・舶載・受容展開・保管に関する総合的な基礎研究」による研究に基づくものである。

（まさの かずお・実践女子大学教授）